

翌日——八月四日、午後六時。陽はまだ沈まず、俺の時間だと言わんばかりに地上を照らしている。

待ち合わせ場所の駅前には、時刻ちょうどに着いたはずだったけど、既に詩織は来て僕を待っていた。壁に体を預けながら、何やら本を読んでいる。

近寄って、ぽんと肩を叩いた。びくつ、と詩織が反応する。その様子が面白くて、僕はくすくすと笑い出す。

「や、詩織」

「鐘か……。もう、びつくりしたじゃん」

詩織はむう、と口をとがらせた。たつたのそれだけで、きゅつ、と心臓が飛び跳ねる。動揺を隠すように、僕は咳払いをした。

「大分待ったんじゃない？」

「んー、十分くらいかな。別に暇はしてなかったから、大丈夫」

「それ」僕は詩織が読んでいた本を指差した。「何読んでたの？」

「昨日部屋の掃除してたら出てきたんだ。小学生くらいの時になくしたと思ってたのに」  
詩織は文庫本の表紙を僕に見せる。さすがに名前くらいは知っていた。サン・テグジュペリの「星の王子さま」。ページは黄ばんで、大分古くなってしまっている。

「すごいよ、この本は。難しい単語なんか全然使われてないのに、こんなに心に響くなんて。鐘、読んだことある？」

「ううん、ない」

読書はあんまりしないほうだ。マンガなら結構読むんだけどさ。

「今度貸してあげる。これは読んだほうがいいですからね」

何故か丁寧語になって、詩織は本をバッグにしまった。さて、と手を打つ。

「そろそろ行こっか」

「ああ、うん」僕は詩織をじっと見た。

「何？」

「いや、服がさ」

今日の詩織の服装は、白地に絵の具を零こぼしたようなペイントの丸首のカットソーに、明

るいブラウンのシャツだった。パンツはベージュのクロップド。爽やかで、詩織に似合っていることは間違いない。ただ、

「……浴衣ゆかたで来るのかなーとか期待してた、ちよつと」

「ばかばか」

詩織はげんこつでぼかぼかと僕を叩いた。

「そんなお祭に溶け込んだ真似できますか！ 恥ずかしいなあ」

「そうなの？」

「そうなの。何、これじゃ不満？」

「とんでもないです」僕はぶんぶんと風力発電できそうなくらいに首を振る。

電車を乗り継いで、目的の駅に着くと、ホームは人波でごった返していた。浴衣姿のひともわりと見かける。祭に行くひとがほとんどなんだろう。

「ひと、多いね」

「うん。はぐれちやいそう」

詩織がちよんと僕のシャツのすそをつまんだ。また胸の中がジャンプする。ここで「こ

「らこらシャツが伸びちやうじやないか握るのはシャツじゃなくて僕の左手にしようぜ」とも言えたらいいのに。

実際は頬が熱くなつて前を向くのが精一杯だ。情けないことこの上ない。

改札を抜けて、駅の外へ。

時刻は六時半を過ぎたところ。爽やかな夏風が吹いていて、傾いた陽が、高層ビルの少ない低い街並みを穏やかに照らし出す。

ただ、やっぱり暑い。でもこの暑さは気温のせいじゃなくて、きつとひとが多すぎるせいだろう。人々は大きな河のような流れになって、駅からほど近い港のほうへと流れ出ていく。僕と詩織もその流れに従った。

五分ほど歩いたところで、ぼつぼつと出店が現れ始める。祭の予感に、心が浮き立つ。わくわくするこんな気持ちは、子どものころから変わらないものの一つ。

「こういうの久しぶりだなー」

うつとりと、詩織が目を細める。「何でお祭りつてだけで、こんなにわくわくするんだろ」「分かるよ。詩織、夕飯はどうしよう?」

「ここで食べるつもりだったけど、鐘は?」

「俺もそれでいいや」

道の両脇に、ぼつちりと屋台が並び立つ。たこ焼き、焼きそば、チョコバナナに綿あめ。金魚すくいに射的、くじびきなんかも。そのお店の一つ一つから、ソースや醬油しょうゆの匂い、客を呼ぶ声なんかが響いてきて、混ざり合う。一つになる。

「小学生のころくらいから、常々思ってるんだけどさ」

詩織は五十円で手にいれた綿あめにかじりつく。

「こういう出店って、二つに分類できるんだよ」

「分類？」

「そ。フード系か、エンターテイメント系か。つまり、食べ物売るか、ゲームみたいに楽しむところか。それ以外のお店って、見たことないよね？」

「えっと……」ちよつと考えてから、答える。「あ、確かにそうかも」

「でしよでしよ？」

詩織は得意げに胸を張った。「だからわたしが屋台を出すなら、第三勢力を狙うね」

「例えば？」

「うーん、そうだな。お祭りのガイドブックを作って売るとか。ここのたこ焼きは安くて

美味しいですよーとか、ここは花火がよく見える穴場ですよーとか」

「いいね、それ。需要ありそう」

しばらく、そんな下らない話をしながら歩いた。その間に僕はたこ焼きとフランクフルトを買って、詩織はラムネとお好み焼きとりんごあめを買った。詩織の言うところの「エントナーテイメント系」屋台には一度も足をとめなかつたけれど、それは僕らの食い意地が張っているからというわけでは断じてない。

光の速さで時間が過ぎていく。気づかないうちに陽が沈み、周囲が闇に染まる。提灯ちようどんに明かりが灯るとも。熱気は収まり、夜が来る。

昔——小学校に上がる前くらいに感じたことが甦よみがえる。夜つて不思議だなんて。昼間はあんなに明るかったのに、ただ時間が過ぎただけで、こんなにも何も見えなくなる。ちよつと先の視界も失われてしまう。

そのことに少し、どきどきしていた。あれはもしかしたら、家の中でかくれんぼをしたとき、押入れの奥に隠れて、胸を高鳴らせた感覚と同じものだったのかな。

「花火、あとどれくらい？」

「今、七時半過ぎ。八時からだから、もうちよつと時間はあるよ」

詩織がケータイの時刻表示を見ながら教えてくれた。

「でも正直、もうお店は見尽くしちゃったんだよねー。鐘はどう？」

「俺ももう腹一杯」

本当だった。たこ焼きはともかく、フランクフルトがあんなに大きいと思わなかったんだ。優に二十センチはあった。そのくせ火が通りきつてなくて内側はまだ冷たかった。俺の二百五十円を返せよ！ と叫びたくなつたのはこの際秘密で。

「詩織、花火つてどこから良く見えるの？」

「いや、知らないよ」

「え、ガイドブックに載せるんじゃないよ」

「例えばの話だってあれはー」詩織が頬を膨らませる。

相談した結果、静かなところを目指すことにした。人ごみにも少し疲れていたし。大通りを逸れて、小道へと向かっていく。

提灯や屋台の明かりから遠ざかるほどに、人影も少なくなり、音や匂いも失われていく。僕らの足音、風の感触、通り過ぎる車の残響、どこかの犬の遠吠えとほほ。世界を構成するものがどんどん単純になる。数を減らす。

歩いていけるうちに、いつしか、海沿いに出ていた。三度目の海、けれど、初めての海。僕が川を下ってたどり着いたのとも、春にみんなで訪れて馬鹿騒ぎをしたのとも、違う場所だ。

僕らの胸の高さくらいにある手すりが、ずっと遠くまで続いていた。ひとの数も、屋台のある通りよりはぐんと少ない。

「もしかして、ほんとに穴場来ちゃった？」

「そうかも。でかしたね」

やったね、と詩織と小さくハイタッチ。ぱん、と一瞬、手が触れ合う。心地よい音が鳴り、それも空気に溶け込んで、消えてしまう。

目の前に広がる海は、どこまでも暗い。けれどそれはじつとりとした暗さじゃなく、例えるなら、淡色の絵の具のような、純粹な暗さだった。さらさらとした水面に、さざ波が立っている。

僕はそつと、詩織の横顔を盗み見た。

一際強く、心臓が跳ねる。

首を僅かに上に向け、小さく息を吐いて。



鼻筋の通った顔に、穏やかな決意を刻み。

透き通った静けさを、両目に宿しながら。

詩織は空を見つめていた。

思わず息を止めていた。それほどに、詩織は美しかったから。

そして——僕はそんな詩織を、やけに遠く感じてしまったからだ。

理由は分かっていた。

自らの欲みずかしいものを解し、何をすべきかも知っている。

自分が何をしたいのかも分からず、前に進めずにいる。

その差だ。

詩織が振り向き、僕を見つけた。吸い込まれそうなほど深い瞳が、にこりと笑う。

「鐘」

「……何」

「思いだしたよ」詩織はふっと息をついた。「もう、一年経ったんだね」

「……ああ」

時間が止まる。記憶が飛ぶ。返事は掠れて、声にならない。

昨夏、高校一年生の一学期。

暑かった。うんざりするくらい気温。放課後。教室に差し込んでいた赤色のクレヨンみたいな光。両手で抱えるほどに大きかった望遠鏡。そして、初めて知った、詩織のこと。

断片的な映像は散らかって、やがて、一列に整理され、

僕の意識は、一年と少し前のあの日に、引き戻された。